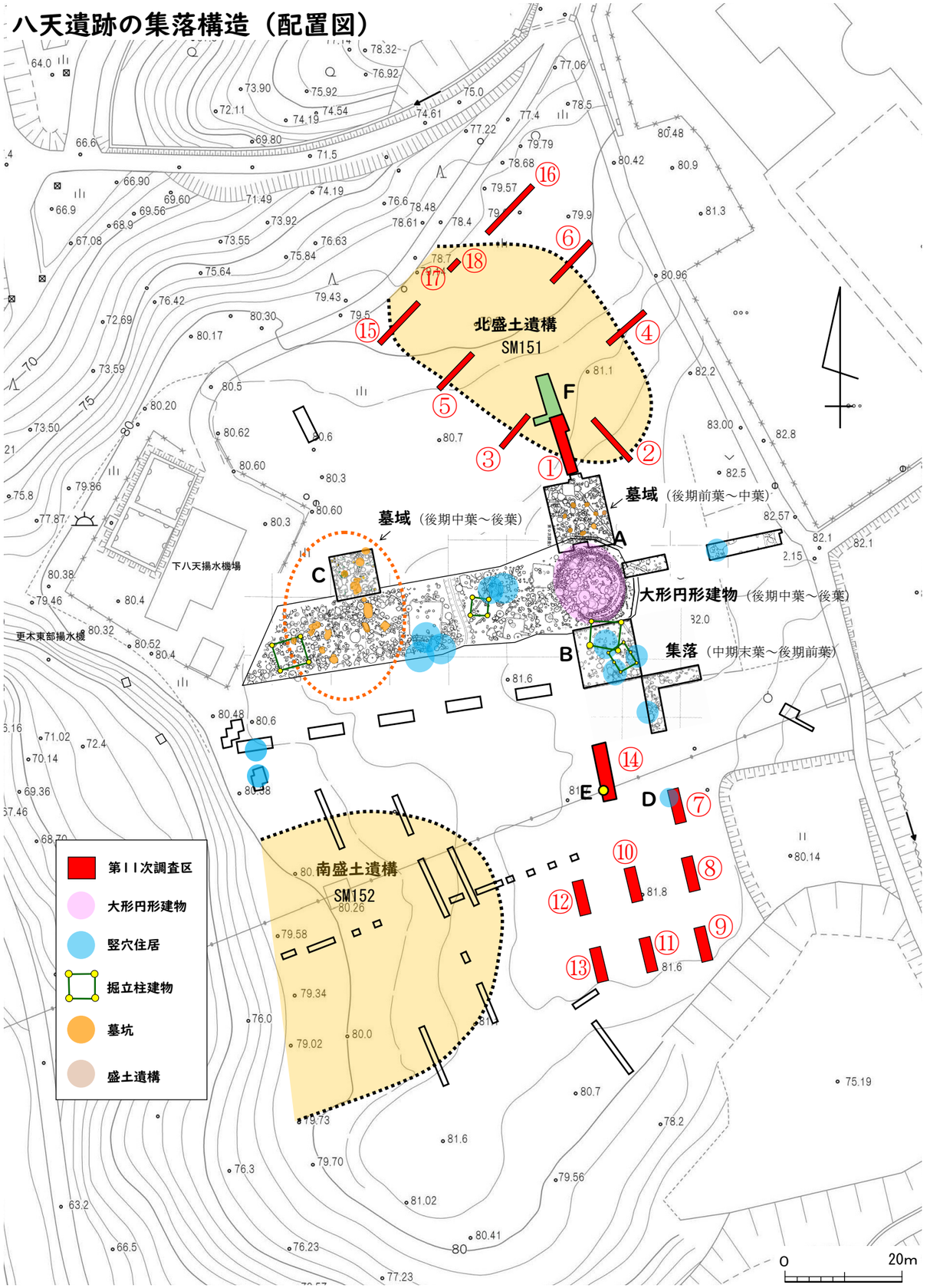
八天遺跡の集落構造（配置図）



八天遺跡第11次調査の概要

○調査の成果

第11次調査は、①台地南東部高台における遺構分布の確認、②台地北斜面における盛土遺構の範囲確認、の２点を目的として実施しました。その結果、縄文時代の竪穴住居跡１棟、炉跡１基、大形柱穴１基、土坑約150基、盛土遺構１か所を確認しました。また、古代（平安時代）の竪穴住居跡４棟を検出するとともに、中世（館跡）の外堀と土塁を再確認しました。

特筆すべき成果として、①大形円形建物跡出現期である後期中葉の大形柱穴を新たに１基確認したこと、②北盛土遺構の形成期は中期末葉から後期前葉までと考えられるが、その後谷部に後期中葉の遺物が多く流れ込んでいる状況が確認されたこと、の２点が挙げられます。

○集落構造との関係性

６年間の調査で、盛土遺構が台地の南北に存在し、それらに挟まれるように数多くの遺構が分布することが明らかになりました。盛土遺構は度重なる「もの送り」、あるいは谷状地形の埋め立て（造成）の結果、形成されたと考えられます。

中期末葉～後期初頭（約4500～4200年前）に最初の本格的な集落が営まれます。複式炉を備えた竪穴住居跡と貯蔵穴が数多く分布します。今回の調査でも竪穴住居跡１棟、土器埋設を伴う炉跡１基が見つかっています。

後期前葉（約4200～4000年前）になると、掘立柱建物跡が出現します。柱穴が大きく深いことから、大規模な建物が何棟か存在したとみられ、この時期に集落構造が変化したと考えられます。今回の調査で見つかった大形柱穴は、柱痕跡から後期中葉（約4000～3600年前）の遺物が見つかっており、やや新しい可能性が考えられます。大形円形建物の出現期にあたり、場所も近いことから、関連する建物と想定されます。

後期後葉（約3600～3200年前）には大形円形建物が存続するとともに、台地西側に墓域が営まれます。これまでの調査で配石遺構や焼けた人骨を集めた墓坑等が確認され、耳・鼻・口形土製品などが出土しています。これらは、死者に対する供物あるいは儀式の結果として副葬されたものと考えられます。

掘立柱建物跡（令和２年度） **配置図 B**

大形円形建物跡（昭和51年） **配置図 A**

配石遺構（令和３年度） **配置図 C**

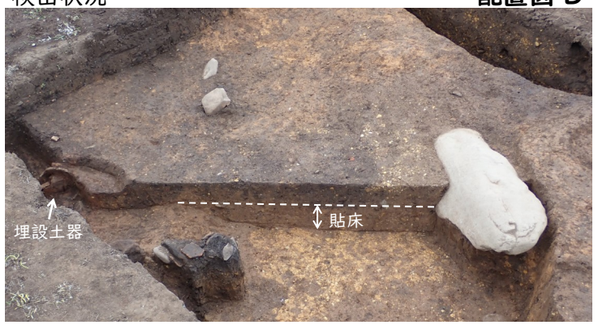
令和６年11月２日（土）

北上市教育委員会教育部文化財課

＊令和６年11月５日（火）改訂

縄文時代中期末葉の竪穴住居跡

検出状況　**配置図 D**



炉周辺の様子

竪穴住居は、地面を掘り下げて壁と床を作るものです。これまでの調査で見つかった住居跡は浅いものばかりでしたが、今回見つかった住居跡は竪穴が深く、しっかりとした壁と床が確認されました。また壁際には周溝が認められます。

この住居跡は直径約５ｍで、中央には埋設土器が設置されています。周囲が焼けていることから、炉の一部と考えられます。

床面では10㎝程度の貼床が確認されました。床上からは多くの縄文土器が見つかっています。住居廃絶後に棄てられたものと考えられます。

また、東端の床上で幅20㎝×長さ70㎝の大きな石が見つかりました。加工された痕跡はありませんが、住居に伴う可能性が考えられます。立石として設置され、儀式に使用されたものかもしれません。

縄文時代後期中葉の柱穴

八天遺跡では規模の大きい柱穴が多く見つかっています。これまで見つかった柱穴には、①直径50～60㎝の柱痕跡が明瞭に認められる、②柱痕跡外の埋め戻し土には大量の火山灰粒（パミス）が混ざっている、③直径・深さともに１ｍ以上の大形のものが多いという３つの特徴があることが分かっています。

このような柱穴からは、これまで縄文時代後期前葉の土器が見つかっていますが、今回は柱痕跡部分から縄文時代後期中葉の土器が出土しました。大形円形建物が建てられた時期と一致することから、大形円形建物跡と同時期に掘立柱建物跡もしくは柱列が存在していた、又は柱が建てられていたのは後期中葉より前であるが、後期中葉になって柱が抜き取られて埋め戻された等が考えられます。いずれにしても今回見つかった柱穴は、大形円形建物跡との関係性を考えるうえで重要な遺構です。

石棒出土状況（中央円形の段差は柱痕跡）　**配置図 E**

柱穴から出土した遺物（石棒と後期中葉の土器）

北盛土遺構

調査区②　遺物出土状況

調査区④　遺物出土状況

「盛土遺構」は、縄文人が土器や石器、炭や焼土等を継続的に廃棄することで形成されています。本来北盛土遺構がある場所は、北に傾斜する谷でしたが、廃棄行為の繰り返しによって埋め立てられています。

今回の調査では、分布範囲を特定するために複数の調査区を設定しました。その結果、幅25ｍ以上、長さ40ｍ以上の大規模な盛土遺構であることが分かりました。

第８次調査（令和３年度）の知見では、この盛土遺構は厚さ60～80㎝程度であり、膨大な量の土器や石器が出土しました。そのほとんどは中期末葉～後期前葉のものでしたが、今回調査区⑱で新たに後期中葉の土器がまとまって見つかりました。継続的に遺物が廃棄され、谷が埋め立てられたものと考えられます。

また、調査区④・⑥・⑯からも後期中葉の土器が多く出土しました。それらは自然堆積の黒色土から焼土や炭化物を伴わずに見つかるものが多く、北盛土遺構の形成終了後に台地上から流入したものと考えられます。

調査区④からは土偶やスタンプ形などの土製品も多く出土しました。これらは実用的な道具ではありませんが、縄文時代の精神文化が伺えます。このような土製品がどのように使われていたのか、ぜひ皆さんも考えてみてください。

調査区④から出土した各種土製品

北盛土遺構（令和３年度調査）　**配置図 F**